
女神

勝目博

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

女神

【Nコード】

N3078D

【作者名】

勝目博

【あらすじ】

気分良く起きた亮二は、何かの予感を感じた。それが、どんな予感さえ理解できずに、行動を起こした。

冬

珍しく、亮二の寝起きは爽快だった。窓から射す朝日は、カーテンの隙間をぬって亮二の顔を容赦なく照らした。一瞬、眩しいとは思ったが、冬の日差しは意外に優しくかった。目を擦り、目覚まし時計のアラームを止めたが、設定した時間よりも20分は早かった。不思議と眠気はない。いつもならば、何度もアラームを止めて、ようやく起き出す亮二だが、得した気分になが弾んだ。その時、何かの予感を感じたのだ。それが何かは、分からない。出会いなのか、吉報なのか、はたまた宝くじでも当たるのか、良い予感なのかさえ分からなかった。しかし亮二は思った。こんなに良い気分は初めてだ。きつといいことが待ってるぞ、と。今日は日曜。亮二にとっても、週に一度の休日だった。一週間働いたんだ、美味しい物でも食べに行くか。週に一度の休日でも、ほとんど家でゴロゴロ過ごす亮二は、予感のこともあり、出かけることを決めていた。家にいては、何も起きない。そう思ったのだ。シャワーを浴びて、トーストだけの簡単な朝食をとり、お気に入りのコートを羽織って亮二は家を出た。12月も半ばを過ぎ、寒さも本格的になって来る頃だが、今日は春とも言える暖かさだった。亮二のアパートは住宅地に建っている。小さなアパートだが、静かで最寄の駅も近かった。ゆっくり歩いても10分程度。その間亮二は、家々に飾られた、イルミネーションに見とれていた。もうすぐ、クリスマス。しかし、亮二には一緒に祝う彼女もない。家族も遠く離れた地で暮している。この三年、寂しいクリスマスを過ごしてきたのだ。高校を出た後、亮二は今の会社に就職した。大学に行く学力は十分にあつたが、亮二の家庭は母子家庭。経済的に苦しい母に、大学に行きたいとは、言えなかったのだ。しかも、亮二には2人の弟も居たのだ。生活の苦しさを、少しでもやわらげたいと、亮二は遠く離れた会社に就職を決めた。母は、そんな亮二の手をとり、ごめんねと、一粒の涙を流して送り

出した。毎月仕送りしながらも、亮二は趣味のレコードを、買い続けた。CDではない、レコード盤のジャズ音楽。確かに、CDの音は良いと認めてはいたが、時代の風が感じられずに、レコードの音に魅了されていた。月に一枚。亮二は決して無理はしなかった。少しでも余裕があれば、仕送りとは別に送っていた。今月分はまだ購入していない。そこで亮二は、行きつけのレコード店へと行き先を決めた。電車で7駅。渋谷の街は、若者で賑わっていた。日曜のせいもあって、家族連れも多く、一人歩きの亮二は、かすかに恥ずかしさを感じた。若者のほとんどがアベックか、グループなのだ。亮二はもてない訳では決してなかったが、入社と同時に同級生の彼女と別れたのだ。

今の会社には若い女子社員はいない上、残業も多く出会いがなかった。上の弟も学校を卒業した今、あらためて寂しさを感じていた。道玄坂を登っていくと、右に曲がる横道がある。その道を曲がって15mほど行くと、小さなレコード店があるのだ。長細い店内は、お客が三人でいっぱいになる。それでも、天井まで飾られたレコードは、マニアの喉を鳴らしていたのだ。

「おう、また来たね、いらっしやい」50は越えていると見える店長は、毎月欠かさずにやってくる亮二を、しっかりと覚えていた。「今日は、何をさがしてるの？」

「まだ決めてないです。いいのがあればと思って・・・」そう言いながらも、亮二の心は予感に動かされていた。もしかしたら、秘蔵のアルバムが手に入るかも。そう思っていたのだ。

「うーん、珍しいものは手に入ったのだが、状態がわるいのさ。君は結構うるさいからね」亮二の音へのこだわりも、この店長は把握していた。

「君好みの一品はないな。来週来てごらん。年末の最終入札でいいが入るかもよ」

「ありがとうございます。じゃあ、来週来ます」亮二がこの店を気に入った理由の一つがこの店長の人柄だった。無理に売りつけよう

とはしないのだ。いいものがない時は、はっきりと言ってくれて、お客の好みを理解していたからだ。どうやら、レコードに関する予感ではないようだ。亮二は困った。ほかに当てがなかったのだ。かと言って、このまま家に帰ってしまったら、折角の予感が台無しになってしまいそうに思えた。仕方なく、ちよつと早めの昼食をとることにした。しかし、いつもと同じラーメン屋では、予感とは無縁に思え、少しはお洒落な店に入ることにした。ところが亮二はこの街を知らない。レコード店と、道すがらの店しか知らないのだ。それこそ有名なセンター街さえ、行ったことがない。天気もいいし、予感もある。亮二は渋谷の街の探検に出かけることにした。亮二は駅前へと戻った。そして、忠犬八子公の前で全ての方向に目を向けた。どちらに行けばいいのか、必ず予感がすると思ったのだ。今降りてきた道玄坂、有名デパートの本店通り、センター街に代々木方面。ところが、どちらに向いても何も感じない。何も心に響かないのだ。おかしいな、と思いながら、ぐるっと振り向いたその瞬間、亮二の胸に衝撃が走った。線路を越えた宮益坂方向に、何かが待っていると思えたのだ。まるで、手招きで呼ばれたようだった。線路を越えると、並木通りが空にも続くように上っていた。予感は確かにこつちからだった。はじめてみる風景に、心弾ませ亮二は坂を上り始めた。ふと見ると少し先に小さなイタリアンレストランの看板が見えた。わき道を2つ越えた角だった。よしあそこに入ろう。そう決めて、歩く速度を速めた。亮二はレストランで、素敵な人めぐり合う予感を感じていた。いや、そう思い込んだのだ。ところが、1つ目のわき道を越えたとき、心浮き立つ予感がぶつくりと途切れたのだ。途切れた音が聞こえたと思うほどはつきりと感じたのだ。あれっと思ひながら2、3歩戻ったときに、またも予感が踊りだした。はつきりと心の中で踊りだしたのだ。そこは丁度わき道の真ん中だった。そうか、予感ほこつちからか、と亮二はわき道に折れたところが、レストランはおろか、店舗もないのだ。どうやら住宅地のようだが、小さな家と数軒と駐車場しかなかった。それでもしば

らく歩いていくと、住宅の一階を店舗にしたレストランがあった。

亮二は迷わずその店に足を踏み入れた。店内には4つのテーブルが置かれていたが、お客は誰もいなかった。時間は既に12時を回っている。一番混む時間帯のはずだが、誰もいないのだ。ちょっと離れているからな。亮二はそう思い席に着いた。驚いたことに店内の壁には、数々の名盤ジャズレコードが飾られていたのだ。しかも、そのどれもが新品と言ってもいいほどの保存状態だった。50年代から60年代のレコードには、カバーすらかけていない。どうやって保存したのか、見当も付かなかった。

「いらしゃいませ」亮二が壁を驚きの眼で見るうちに、いつの間にか隣に女性が立っていた。亮二は慌てて頭を下げた。そして、その顔を見た時、2度目の衝撃が亮二の胸を貫いた。歳は亮二と同じくらい。目は二重で大きく、鼻筋もしっかりとおり、小ぶりの口は柔らかそうな厚みを持っていた。まったくの好みなのだ。亮二の思い描く理想の女性だったのだ。予感はこの事だと、亮二は確信を持っていた。

「何にしますか？」亮二から見たら女神とも思える女性は、小さなメニューを差し出した。出された水を飲み干し、亮二はメニューを受け取った。

「お決まりになったら呼んで下さい」女神は亮二の席から離れていた。亮二はメニューを見る振りをしながら、女神の行動を眺めていた。この家の娘だろうか。一生懸命にスプーンやホークを磨いている姿は、亮二の心を確実に溶かし始めていた。亮二の視線に気がついたのか、女神は僅かに笑みを浮かべて、亮二の席に向かってきた。

「お決まりですか？」亮二は慌ててメニューを、指差した。

「ハヤシライスですね」咄嗟に指を差したはいいが、亮二はハヤシライスがどんなものなのか判らなかった。しかし、そんなことはどうでもよかった。

「はい」小声で返事をしたが、亮二の興味は女神だけに向けられて

いた。味なんかわからない。とにかくゆっくり、女神を見ながら亮二は綺麗に平らげた。しかし、言葉をかける勇気を亮二は持ち合わせていなかった。翌週、亮二はレコード店には向かわずに、まっすぐと女神のいる店へと向かった。やはりほかにお客はいない。知り合いになるチャンスでも、結局は亮二は話しかけられなかった。それから、毎週その店に通うようになったのだ。年も明け、2月も終わりになる頃、やっと亮二は話しかけた。

「す、すごいコレクションですねえ」亮二は壁のレコードを指差し尋ねた。

「亡くなった、父のものです」女神は優しく答えた。

「すいません、変なこと言って・・・」

「いいですよ。もう、昔の話ですから」女神の髪を書き上げる仕草に、亮二は我を忘れそうになった。

「でも・・・」女神が言葉を閉ざした。

「でも、なんですか」亮二は焦った。一瞬嫌われたのではないかと思ったのだ。ところが女神は笑い出し、亮二を見つめて呟いた。

「やっと、話掛けてくれましたね」

「えっ」亮二は自分の耳を疑った。

「なかなか話しかけてくれないから、内心、心配だったの。嫌われてるのかなって」

「とんでもないです。恥ずかしくて・・・」亮二の顔は真赤になった。

「本当！嫌いじゃない？」女神は亮二の顔を覗き込んだ。女神の息使いが目に見えるような近さだ。亮二は慌てて首を振った。

「本当です。す、好きです」亮二は、はっきりと自分の思いを伝えることが出来た。それから毎週亮二は通い、女神との仲は深まっていた。女神は冬と名乗った。冬に生まれたのが理由らしい。父はいない。母と二人で切り盛りしているそうだ。しかし、不思議と母の姿を見たことはなかった。キッチンにいるとしても、いつも無人の店ならば、一度くらいは見かけても、良さそうに思った。とこ

ろが、声さえ聞いたことがなかったのだ。反面、冬との時間を邪魔されずに済んでいたのも事実だった。

記憶（前書き）

亮二は不思議な世界に、紛れ込む
そこで亮二が見たものは・・。

記憶

その朝亮二は、寒さから目を覚ました。そろそろ3月、春の太陽が差し込む時期だ。ところが、カーテンを開けた亮二の目に飛び込んだのは、一面の銀世界だった。冬の最後のあがきだろうか、見渡す限り雪化粧が施されていた。昨夜のニュースでは、雪のゆの字も言っていない。亮二は、軽く身震いを起こした。食卓兼のコタツは、つい最近片付けたばかりだった。ストーブの灯油はわずかに残っている。去年の残りだ。北国育ちの亮二には、東京は異常に暑く感じ、ストーブはずっと使っていないかった。そんな亮二が寒く思ったのだ。表はかなり冷え込んでいるように思えた。それでもストーブに灯がともると、幾らか寒さは和らいだ。そそくさと出勤準備を整えて、亮二は表に飛び出した。ところが、外はおだやかに晴れ、どこにも雪は積もってもしなかった。

「えーなんでだ」つい言葉が口から漏れた。振り返った部屋の中では、消したばかりのストーブが、まだチンチンと音を立てていた。窓側に回り込んで見たが、そこにも雪はなく、穏やかな朝の日差しがあたりを照らしていた。キツネに化かされたようだった。窓からの景色はなんだったのだろう。亮二はもう一度部屋に駆け込み、カーテンを開いた。やはりそこにも雪はなかった。夢でも見たのだろうか。それにしても、ストーブもつけ、寒さに震えた感覚は事実だった。しかし、悠長に考えている暇はない。出勤時間は常に過ぎていた。いつもより、乗った電車は一本遅い。だが、一本ならば、駅から走れば十分に間に合う時間だった。会社の最寄の駅までは、30分ほどで着くが、その電車は異様に空いていた。何度かこの時間の電車にも乗った事があったが、こんなことは初めてだった。一瞬、祭日ではと思ったが、週の真ん中祭日でもなかった。席は十分空いている。亮二はゆったりと腰をおろした。暖房のせいでお尻が温かい。亮二はいつの間にか眠ってしまった。目覚めたときには、電車

は見たこともないところを走っていた。腕時計に目をやると、始業時間はとうに過ぎ、そろそろ、午前の休憩だった。亮二は慌てて携帯を取り出した。乗客はほとんどいない。同じ車両には、年老いたおばあさんと、学校さぼりらしい学生だけだった。

ところが、アンテナ表示は出ているものの、いつこうに電話はつながらなかった。まるで携帯の会社が消滅したように、何の反応もないのだ。早く降りなくてはと立ち上がった亮二を、更なる驚きが襲った。電車は三両なのだ。亮二の乗る車両の前後に、一両ずつしか連結されていないのだ。亮二の頭は完全に混乱していた。通勤電車で三両編成など、見たこともないのだ。更によく見てみると、明らかに古いのだ。車両は新しいが、形が古いのだ。まるで故郷のローカル線のように見たのだ。しかも、車窓の外を流れる景色は、故郷そのものだった。見慣れた山並みは亮二の記憶にも、しっかりと残っている。ただ、時折見える家々は、今の作りとは明らかに違っていた。サッシもなければ窓もないのだ。見えるのは、木製雨戸と障子紙だった。亮二は思い切り目を擦った。夢ではないかと思ったのだ。しかし電車はゆっくりと駅のホームに停車した。見慣れたホーム。見慣れた改札。まぎれもなく亮二の故郷の駅だった。ただ、記憶に残る記念樹はない。駅の開設50周年記念に植えられた木だ。亮二の頭は混乱の極みに達した。

光の住人（前書き）

覚醒した亮二

不思議なお店の少女。

初のデートはどうなるのか・・・。

光の住人

「大丈夫ですか」亮二は混乱したまま座り込んでいた。そこに声をかけたのが、電車で一緒の学生だった。亮二が気分でも悪くしたのかと、声をかけたのだ。

「ありがとう、なんでもないよ」そう言っただけ顔を上げた亮二は、少年の顔に見覚えがあると思った。

「うん？君、学校は？」何故そんな質問をしたのか、亮二には分からなかったが、聞かずにはいられなかった。心の中で、何かがそう言わせた様にも感じた。

「早退です。まだ2時間目だったけど……。身体が弱いのですね。僕の名前は……」最後まで聞く必要はなかった。少年のはにかむ笑顔に、亮二の古い記憶が蘇ったのだ。亮二が中学入学間もない頃に、病気で死んだ亮二の父。その父が見せてくれた自分の学生時代の写真。その笑顔が今、目の前にあったのだ。しかも名乗った名前も、父の名前に相違なかった。死の間際、亮二の父はこう言った。

「私は身体が弱かった。でも、お前たちは元気だ。それが一番嬉しい。身体をいたわれ」

亮二は若かりし父の顔を見ながら、意識が遠のく自分に気が付いた。目の前のもやが徐々に視界を奪っていった。

「……か。大丈夫か」ふと目を開けると、いつもの課長の顔が見えた。

「えっ」亮二は何度も瞬きを繰り返した。

「まったく。えっ、じゃないよ」課長は亮二を抱き起こした。

「急に倒れるから、ビックリしたよ。本当に、大丈夫か」心から心配しているのが、亮二にも伝わった。

「はい、大丈夫です」亮二は身体の手や胸を撫ぜ回したが、これといった異変は見つからなかった。そこはいつもの倉庫。毎日亮二が

働く場所だ。食料品の卸問屋で、仕入れた商品を箱詰めにして送る倉庫。誰でも最初はこの倉庫からだ、と聞かされた亮二の仕事場だった。時計を見上げると、10時10分前。しかし亮二には、出勤した記憶も、仕事を始めた記憶もなかった。電車を乗り越し、懐かしい故郷にいるはずだった。亮二は頭をかきながら、課長に尋ねた。

「僕、今日ちゃんと来ましたか」課長は目を丸くした。

「何、言ってるんだ。しょうがないな。こっちこい」課長は倉庫の隅に亮二を連れて行った。

「君は、まじめだし、心配だから言っけどな。この頃顔色悪いぞ。心配事でもあるのか」怒ると怖い課長だが、部下の事は人一倍考えていた。もちろん亮二がまじめだからこそだ。

「何も、心配はありません。大丈夫です」

「そうか、それならいいが・・・まあ、今日は帰りなさい。倒れた上に顔色もよくないようだし、出来たら医者にかかったほうがいいだろう」確かに、普通でないことは亮二も理解していた。頭はボーっとしたままだ。亮二は言葉に甘えて帰ることにした。タイムカードの出勤時間は、いつもと変わりしなかった。全ては夢なのか。夢としたなら、意識のないまま出勤したことになる。眠った状態だ。それも、考えられなかった。ところが、帰宅中に電車の中で聞いた話は、亮二の疑問をさらに大きくした。

「今朝の雪、ビックリね」

「降るなんて言っただけなのに」高校生だろうか。2人の女子学生が話していた。やっぱり、今朝の雪は本物だった。寒さを感じ、カーテンから見た景色が、現実だったのだ。亮二はそこまでは起きていたと確信できたが、いつ現実から引き離されたのかが、解らなかった。アパートの扉を開けるまでの短時間に意識を失ったのは、確からしい。どんなに思い出そうと記憶をたどったが、その答えは見つからなかった。亮二は無性に冬に会いたくなった。日曜以外に会うのは初めてだ。冬はきつと驚くに違いない。亮二はそう思った反面、忙しくて話も出来なければどうしようと、言う気持ちもあつ

た。ウィークデーは込み合ってるかも知れないのだ。家に寄らずに真っ直ぐ行けば、丁度、ランチタイムのはずだった。亮二は冬のことを考えながらも、不思議な店にも興味を持っていた。第一にあのレコードだ。無造作に飾られているにしては、すべて、保存状態は良い。そしてメニユー。2度目に訪れたとき、じっくりと見たのだが、メニユー全体が古めかしく思えた。紙が古いというわけではない。商品としてのメニユーが古いのだ。ハヤシライスに、ライスカレー。今はどこでも、カレーライスだと思っていた。そして、ビフテキ。初めは意味が解らなかった。冬の説明で、初めてビーフステーキだと解ったのだ。極めつけはオレンジジュース。昔、幼い頃には飲んだ記憶もあったが、今では出回っていない商品だった。一度レコードをかけてもらった事があった。亮二が余りに熱心に聴くため、冬がかけてくれたのだ。夜にはよくかけるらしいが、昼はかけないそうだ。そのアンプに亮二は驚いた。真空管のアンプだった。

電源を入れると、僅かに電流の流れる音が聞こえる。ジーっと言う音は、それまでもが音楽の一部になっていた。一歩でも店に入るとそこが21世紀とはとても思えなかったのだ。しかし、元々古いジャズの好きな亮二には、その雰囲気心地よく、いつも長い時間冬の店にいたのだ。渋谷に近づく頃には、頭のもやもやもすつきりと晴れ、亮二は気分爽快な足どりで、通いなれた坂を上り始めた。羽のように身体が軽い。亮二は思った。冬は本当の女神だと、自分を救う女神だと感じていた。その証拠に、店に近づくにつれ、心も軽くなってきたのだ。一刻も早く店に行きたい。一秒でも早く冬に会いたい。亮二は足を速めた。坂にはランチタイムに繰り出した、サラリーマンやOLでいっぱいだった。「混んでるかな」一抹の不安をよそに、亮二は人々をすり抜け、店へと駆け出した。ところが店は閉まっていた。定休日の看板も何も表示はされていない。目の前には、心の落ち着く楽園があるにも関わらず、無情なシャッターが下ろされていたのだ。亮二は思わずシャッターを叩いた。

「冬さん、冬さん、おやすみですか」何度か叩くうちに、2階の窓

から冬が顔を覗かせた。

「亮二さん、どうしたの、こんな日に・・・」冬の顔は、困惑した表情だった。冬は振り向き、誰かと話していた。母親だろうか。考える間もなく、冬に笑顔が戻り亮二に話しかけた。

「今行くわ、待ってて」下から見上げる冬も素晴らしかった。ネグリジェとでも言うのだろうか、見かけない室内着を着ていたが、普段では判らない身体の線が、日の光で透けて見えた。冬はスタイルも抜群だったのだ。冬は裏から出たのだろうか、家の脇から姿を現した。

「どうしたの、今日は木曜よ。仕事は」亮二は、会社で倒れ、早退したと冬に伝えた。その時冬は、一瞬悲しそうな目をしたが、すぐに笑顔を取り戻した。

「今日は、おやすみな。ごめんなさい。母の調子が悪くて」

「いえ、謝ることはないですよ。急に来たのは僕ですから」亮二は慌てて答えた。

「でもね、今聞いたら、気分もいいから出かけて来なさいって。もちろん、亮二さんがよければの・・・」

「もちろんです」亮二の心ははつきりと躍りだした。やはり、振り向き話していたのは、母親だった。

「じゃあ、用意してくる。待ってて」冬はそう言っただけで家へと戻っていった。初めに感じた予感は当たっていたのだ。亮二に素晴らしい出会いを教えてくれていたのだ。亮二はその予感に、素直に従った自分を褒めた。さらに「よくやった」と声に出して褒めたのだ。しばらくして現れた冬は、それこそ雪のように真っ白だった。腰の辺りからふわっと広がったワンピース。少し短めのコート。そのコートは、スカートの広がりや邪魔しない丁度よい長さだった。そして真っ白なローヒールには、甲の所に小さなリボン。ストラップのない手持ちのバッグ。その全てが真っ白だった。日はまだ高い。その太陽の光が、冬の全てを光輝かせていた。普段の冬でも眩しいのに、今の冬は、光の住人のようなだった。

「行きましょ」冬は躊躇することなく、亮二の腕に手を絡ませた。
「う、うん」亮二の心臓ははるか遠くまで聞こえそうなほど、激しく鼓動を打ち鳴らした。冬に聞こえはしないかと心配だったが、冬は平然と亮二の腕に絡み付いていた。

「食事は。食べたの」亮二は冬に尋ねた。

「ううん、まだよ。そうね、ご飯たべましょ」冬の眼は輝いて見えた。実際、輝いていたのだ。日の光を反射して、キラキラと輝いていたのだ。まるで穏やかな水面に太陽が照り返すように……。

「そうだ、いいところがあるの、そこに行きましょ」亮二の返事も聞かずに、冬は腕を引っ張った。もちろん反対などする気もなかったが、積極的な一面に、正直なところ亮二は驚いた。だが、不快感は微塵もない。冬に対して不快感など起きるはずもなかった。道行く人は、誰もが冬を振り返った。男も女も、皆が冬に見とれていたのだ。亮二は照れくさい気もあつたが、冬といられる自分を誇りにさえ思い始めていた。冬は人の目などは気にも留めない。亮二に話しかけては笑い、自分が話しては笑っていた。その笑顔が、人を惹きつけているのだろう……。

記念日（前書き）

デートで向かった先々で、亮二を驚かす数々の出来事。それは・・・

記念日

冬が亮二を連れて行ったのは、センター街の中ほどにある、お好み焼き屋だった。小さい店だがおいしいのだろう。店内は込み合っていた。しかし運がいい。丁度、席が1つ空いたところだった。店員はしばらく冬の姿に釘付けだった。その眼は、妖精にでも出会ったように、幸せさえ溢れているようだった。

「あつ、すいません。今片付けます」我を取り戻した店員は、空いたテーブルを丹念に磨き上げ、二人を案内してくれた。その間、店内はシーンと静まり返り、冬の姿を見つめ続けていた。店内はもちろんのこと、センター街でも同じだった。通りすがりの人間が、全て冬に注目するのだ。携帯でおしゃべりの最中だった学生まで、話を止めて見ていたのだ。騒がしい通日も、一瞬の静寂に包まれ、普段は聞けない鳥のさえずりさえ聞こえたのだ。ところが冬はお構いなし。他人事のように亮二に話し、屈託もなく笑っていた。ここまできると、亮二の優越感も影を潜めた。それほどまでに皆の目には崇拜の心までもが映し出されていたのだ。席に着くと、店内も喧騒に包まれ始めた。亮二は思い切って冬に尋ねた。

「どう言う事なの。冬は芸能人」的外れな質問に、冬は声を出して笑い始めた。

「まさかでしょ。芸能人が、ウエイトレスをするかしら」そう言われればもつともだった。しかし皆の視線がどうしても気になった。

「じゃあ、何でもみんなは、冬さんを見るの」

「私に聞かれても・・・、誰かと勘違い？きつとそうよ。ね。選んで。ここ美味しいのよ」その笑顔に亮二は何も言えなかった。ただ、冬に似た芸能人などいない。それだけははっきりとしていた。冬の言うように、お好み焼きは美味しかった。冬が作ってくれたから余計にそう感じた。お好み焼きをじっと見据えて、下唇を軽く噛みながら、二つのへらでひっくり返す。その表情がとにかく可愛かった

のだ。東京に就職して丸三年、若い亮二が始めて掴んだ幸せの時間だった。二人はあつという間に4つも平らげた。驚いたことに、料金はタダになったのだ。伝票を渡して財布を出すと、店員が大きな声で叫びだした。

「おめでとうございます。キャンペーンのB賞当たりです」亮二には何のことかわからなかった。すると店員が出てきたレシートを見せ、壁の張り紙を指差した。張り紙には、A賞、食事券5000円、B賞

お食事無料、C賞・・・と続いていた。そして、差し出されたレシートには、赤いインクでB賞と印刷されていたのだ。亮二は財布をポケットにしまい、照れくさそうに店を出た。

「ありがとうございます。ぜひまたご一緒にお越しく下さい」店員の声は外にも聞こえた。ところが冬は外にはいなかった。辺りを見回すと、向かいの雑貨店を冬は覗いていた。冬に向かつて歩き出したとき、一人の老婆が一生懸命に拝む姿が眼に入った。

「ありがたや、ありがたや」老婆は冬に向かつて拝んでいたのだ。亮二は変人でも見るように老婆をながめた。しかし老婆の衣装は派手ではないが、きちつとしたもので、きれいな指輪もしていたのだ。とても変人には見えなかった。亮二は首を傾げながら、冬に近づいた。

「ねえ、聞いて今の店・・・」

「タダだった」

「えっ、何で知ってるの」亮二は驚いた。冬は伝票を渡す前には、店を出ていたのだ。

「だって、あんなに大きな声ですもの、外にいても聞こえたわ」屈託のない笑顔で冬は答えた。冬の言うことは、亮二にも素直に納得できた。

「ねえ、あれ可愛い」冬が指を差したのは、小さな繭玉人形だった。雪ん子のように笠をかぶり、小さな藁の靴を履いていた。雑貨店とは言え、珍しいものだと思っただ。田舎に行けば、繭玉で出来

た起き上がりこぼしなどの人形も売っているが、東京の真ん中では、
そう見るものではなかった。

「買ってあげるよ。ちよつとまつてて」亮二は店に入っていた。
値段は見えなかったが、高くはないだろう。少々高くても、冬が気
に入っただけならば、買ってあげたかったのだ。今日と言う日の記
念としても。ところが、この店でも幸運が待ち受けていた。店舗の
入り口でもらった券が、500円の当たり券だったのだ。繭玉人形
も500円。これには亮二も驚いた。無料で食べた食事に、500
円の金券。買いたいものも500円。出来すぎていた。これも予感
の1つなのかと思っただが、冬以上の幸運はなかった。

「はい」亮二は小さな箱を冬に渡した。

「ありがとう。今日の記念ね」亮二の気持ちと、まるで同じだった。
その時、亮二にも、老婆の祈りの意味するところが判りかけてきた。
冬は本当に女神かも知れないと……。

人の情（前書き）

思いがけない亮二の秘密。触れは人情。

人の情

日も暮れかけたときに、二人は冬の店に戻った。

「今日は、ありがとう。とっても楽しかったわ」夕日を浴びて真っ白な冬が朱に染まった。

「ううん。僕のほうこそ楽しかった。またどこに行きたいな」亮二の答えに、冬はうつむいた。

「そうね・・・、行けたらね」

「えっ」亮二は冬の、言おうとする意味が判らなかった。

「ううん、何でもないの。また来てくれる？」満面の笑みを浮かべて、冬が尋ねた。

「もちろん。絶対に来るよ」亮二はさっきの言葉は忘れていた。満面の笑顔にかき消されたのだ。

「待ってるね」冬は、亮二におやすみのキスを頬にした。一瞬、我を失った亮二だが、家に向かう冬を引き寄せ、亮二は唇を重ねた。

冬も亮二のキスに答えてくれた。夢中だった。亮二の気持ちは、完全に冬に支配されていた。これは亮二が望んだことでもあり、誰に恥じることもない感情だった。夕日が二人を暖かく包み込んだ。長い、時間を忘れるほどに長い時間キスを交わした二人は、名残惜しそうに分かれた。亮二は冬の姿が見えなくなっても、しばらくそこにたたずんでいた。見上げた窓に電気が灯った。既にあたりは真っ暗だった。亮二の心は躍っていた。実際に身体も踊っていたのだ。踊りながら坂を下り、亮二は渋谷の駅に着いた。ところが、踊っていた心の鼓動が、急に激しく脈打ちだした。その鼓動はどんどんと早くなり、やがて亮二の胸を締め付け始めた。「苦しい」亮二は、初めて身体の異変に気が付いた。意識はどんどんと身体から離れ、暗い谷間に吸い込まれて行った。

亮二の意識が戻ったのは、病院のベッドだった。ベッドを囲んだカーテンと消毒液の匂いが、その事を亮二に教えていた。少しは胸

の痛みは収まったものの、起き上がることは出来なかった。人の足音、となりで咳き込む声、かすかに聞こえる話し声。そのうちの足音が、亮二の所へ近づいた。カーテンが開かれ看護師が顔を覗かせた。亮二に気が付くと、看護師は笑顔を浮かべて話しかけた。

「大丈夫ですか。どこだか分かりますか」優しい笑顔の看護師だ。

亮二は言葉を発せられなかった。口の中はカラカラに乾き、唇が腫れ上がったように重かった。

「いいですよ。今、先生呼びますから」看護師は、カーテンを閉めて立ち去った。しばらくすると、数人の足音が聞こえてきた。カーテンが半分ほど開かれ、先ほどの看護師と、医師と二人の看護師が現れた。先ほどの看護師は、注ぎ口の伸びた急須みたいなものに、水を入れて持ってきたくれた。

「ここが分かりますか」医師が尋ねた。口が潤ったせいで、亮二は話が出来た。

「僕は、倒れたのですね」亮二は理解していた。

「そう、意識を失い、ここに運ばれました」医師はカルテに目を落とし、話を続けた。

「身内に、心臓の悪い人はいますか」その言葉で、亮二は胸の苦しみの意味を知った。

「おそらく父でしょう。若いときになりました」亮二の言葉は落ち着いていた。

「貴方も、心臓に欠陥があります。おそらく手術が必要になるでしょう。ご家族はどちらにいますか」

亮二は医師の質問に答えなかった。田舎の母を思い出していたのだ。

「僕は、退院できますか」

「ええ、痛みが取れば大丈夫ですが、早急に手は打ったほうがいいでしょう」医師は明らかに怪訝な表情を浮かべ、亮二に答えた。

「すいません。母には会って話したいので」

「それが、いいでしょう」亮二の気持ちを察して、医師は快く答えた。

翌朝、看護師から退院の許可を受け取った。今日一日問題がなければ、明日の退院が出来るそうだ。亮二は会社に連絡を入れた。課長はしばらく黙っていたが、やがて口を開いた。

「とにかく今は、養生に専念してくれ。足りないものはないか。何かあったら、すぐ連絡しろよ。看護師にも、この番号、教えとけよ」ぶっきらぼうに言い放つ課長だが、優しさは十分に亮二に伝わった。

亮二は翌日退院した。沢山の薬を渡され退院したのだ。亮二は母に電話を掛けた。

「えっ、日曜日かい。夜？そりや構わないよ。お前の家さ」亮二は電話を切った。病気のことは一言も言わなかった。亮二が夜を選んだのは、その前に、冬に会っておきたかったからだ。もし、手術でも受けることになったら、しばらく会えない。冬には言っておきたかったのだ。亮二は退院した足で、レコード店に向かった。ここも来れなくなるかと思ったのだ。

「おゝ久しぶり。何かあったのか」店長の気さくな人柄がにじみ出た言葉だった。

「えゝ、ち、ちよつと・・・」亮二の異変に店長は気が付いたが、その事には触れなかった。

「そうそう、君が来ないから、どうしようと、思ってたんだ。いいのを、取っておいたよ」年末の話を亮二は思い出し、差し出されたレコードを手を取った。以前からほしかった一品で、なかなか流通しない名盤だった。亮二は声に出して喜んだ。

「ありがとうございます。うわゝうれしいな。ずっと探していたんです。へゝ」

「１０００円でいいよ」店長はあっさりと答えた。

「えっ、１０００円？」亮二は思わず聞き返した。どこに行っても数千円以上の値段が付いていたのだ。

「でも、１０００円じゃあ・・・」

「あゝここ。ほら、ここに傷があるでしょ？しょうがない。だから

「1000円でいいんだ」店長の触ったところには、確かに傷があった。しかし、レコードジャケットの隅に付いた小さな傷で、価値的には何の問題もないはずだった。

「その代り。また、来ること。それが条件だ」店長は方目を瞑った。亮二は流れ出そうになった涙を必死にこらえた。1000円を渡し、亮二は店を出ようとした。すると、後ろから店長が話しかけた。

「何があつても、また来ること。忘れるなよ」

「はい」亮二は店から飛び出した。涙が流れるのは分かったが、そのまま亮二は走り出した。店長には分かっていた。顔色の悪い亮二を見て、何かの病気だと確信したのだ。彼もまた幼いわが子を、病気で失った経験を持っていたのだ。

亮二はアパートのベッドに寝転び、天井を見上げていた。買ってきたばかりのレコードが、亮二の心にしみ込んでいく。胸の痛さはまったくない。音楽を聴きながら、亮二の目からは涙が流れた。何度も怒られた課長の優しさ、店員と客との関係を越えた店長の優しさ、思い出すだけで溢れる涙を抑えられなかった。はたして冬は、亮二の話を聞いてなんと言うだろう。話さないほうがいいのか。亮二は悩んでいた。日曜は、あと数時間で訪れる。

故郷（前書き）

故郷に戻った亮一。だが、彼の横には・・・。

故郷

日曜日。着替えと薬を小さなバッグに入れて、亮二は冬の店に向かった。亮二はまだ悩んでいた。話すべきか話さないべきかを、一晩中考えていたのだ。結局は、冬への答えが出ないまま、時間が来てしまったのだ。遅くなれば、帰省が間に合わなくなる。ところが、店の前には冬が立っていた。店のシャッターは下ろされ、冬はちょっと大きなバッグを下げていた。亮二は冬に駆け寄り冬に尋ねた。しかし冬は黙ってうつむいていた。

「どうしたの、店はおやすみなのか？」亮二の質問に、冬は答えず、黙って亮二と手をつないだ。

「冬さん・・・」亮二が何かを言う前に、冬は亮二の手を引き歩き出した。お母さんと喧嘩でもしたのかと、亮二は何も言わずに歩き出した。二人はそのまま駅まで歩いた。駅まで来ると、冬がやっと口を開いた。しかしその内容は、亮二の予想を大きく外れた驚きの言葉だった。

「私も一緒に行くわ。切符はどこまで？」冬の顔は必死に笑っていたが、眼には悲しみが見えた。

「行ってくて、どこへ」冬の答えは想像できた。しかし、聞かずにはいられなかった。

「亮二さんの田舎。行くのでしょうか？」やはり、答えは想像通りだった。冬には隠し事は出来ないようだ。

日曜日の昼下がり。下り電車は空いていた。二人は無言で揺られていた。二人の座るボックス席の向かいに人はいない。冬は亮二の肩に頭を乗せて、静かに目を伏せていた。寝ているわけではない。それは亮二のも分かっていた。だが、なぜ冬は亮二の帰省を知っていたのか。もしかしたら、病気も知っているのでは、と亮二は考えていた。冬には不思議な力がある。老婆が拝み、デートの時にも、一銭のお金も使わなかった。レコード店の店長も、亮二のことを薄々

感じたくらいだ。冬には全てがお見通しなのかも知れない。しかし、冬が何も言わない以上、亮二も何も言えなかった。特急電車で3時間。あとは、ローカル線への乗り換えだけだ。ローカル線は途中の駅で3両編成に減らされる。編成作業の待ち時間に、二人は駅のお弁当を買い込んだ。ずっと無言でいたために、昼食を取り損ねていたのだ。

「お弁当。食べる？ここのはおいしいよ」亮二のかけた言葉に、冬はコクンと頷いた。空は夕焼けが始まりだしたところで、白と青とオレンジの色が絡み合い、駅のホームを柔らかな光が包んでいた。暖かくもあり、ちょっと冷えた感じもする光だった。作業も終わり、ローカル電車は動き始めた。亮二と冬、ほかには2人の乗客しかない。その時亮二は思い出した。この情景、どこかで見たぞと、思ったのだ。あの日、亮二が意識を失い倒れた日だった。思わず亮二は立ち上がった。やはり乗っているのは3両編成の真ん中の車両。乗客は老婆と学生。あの情景そのままだった。冬がとなりにいる以外は……。

「どうしたの」不意に冬が話しかけた。

「いや、何でもないよ」亮二は腰をおろした。よく見ると、顔は違うし服もちがった。何より電車が新しかった。だが、夢とも現実とも言えない記憶と、状況はそっくりだった。駅には早めに着いた。母には夜と伝えておいたが、冬を連れて行くことには、抵抗があった。どう紹介して分からなかったのだ。しかも、話が話だけに、冬が存在が大きく左右することにもなりそうだった。

「私はホテルに泊まるね」冬は亮二の気持ちを察したのか、いきなりそう言うと、一人で歩いていった。

「どこ行くの？この街分かるの」亮二の問いかけに、冬は黙って指を差した。差された指のその先には、この街唯一のビジネスホテルの看板が見えていた。

「わかった。あとで顔出すよ」

「おいしいものを食べさせて」冬はにこりと笑って歩いていった。

まだ、雪は残っている。ロータリーの周りには、除雪された雪が高々と積み上げられていた。その雪の匂いが、故郷をはつきりと意識させた。

「急にどうした」母は食事の用意の最中だった。

「うん・・・」亮二は言えなかった。帰ってすぐには切り出せなかったのだ。

「うまくやってるのかい。全然帰ってこないで」言葉とは裏腹に、その声には非難の色は伺えなかった。

十分亮二の気持ちが分かっていたからだ。3年ぶりに見た母は、かなり老けたように見えた。

「もうすぐご飯できるからね」母は嬉しそうに言ったが、亮二は夕食を断わった。

「何言ってるんだい。その娘さんも連れていらっしやい」母は妙に嬉しそうだった。でもその前に、話しておかなければいけないことがあった。

「かあさん、ちょっといいかな」

「なんだよ、あらたまって」母の顔はニコニコしていた。まるで結婚の承諾を待っているようだ。そう思われても仕方がなかった。いきなり戻って、しかも女性連れなのだ。ほとんどの親はそう思うだろう。エプロンで手を拭きながら、母が居間にやってきた

「さあ、話してごらん。いい娘さんだろうね？」母は完全に勘違いをしていた。

「そうじゃないんだ。母さん。実はね・・・」その時、玄関のベルがひとしきり鳴らされた。

「誰かね？」母は話の途中で席を立ってしまった。玄関の引き戸の音が聞こえた。話し声は聞こえない。

「亮二、亮二。来たわよ。娘さんが」駆け込んできた母の後ろには、冬が立っていた。

「まあ、まあ、遠いところを。汚いところだけどゆっくりしてね。この子は何にも言わないから・・・」

母は慌てて茶碗を出し始めた。

「おかあさん、お構いなく。座ってください。私がします」冬は母のとなりに立膝で立ち、急須に茶の葉を入れていた。母の目から大粒の涙がこぼれたのを、亮二ははつきりと見たのだ。

「お母さん、だって・・・。うれしいね。お父さんも喜んだらうね」母は目頭を押さえて泣き出した。亮二は何も言えなくなつた。病氣の話は結局なされなかったのだ。冬は終始母を気遣い、率先して台所に立ち、楽しい食事が進んでいった。ただ、下の弟だけは、冬に見とれて食事に手を出さなかった。

求愛（前書き）

引き込まれる亮二の愛。そして1つになる日が・・・。

求愛

「送ってくるよ」亮二は母に言った。

「氣を付けるんだよ。冬さんまた来てね」母は、冬が氣に入ったようだ。何度も、いい娘さんだと言う母に冬も恥ずかしがっていた。

冬の動きは素晴らしかった。何度もこの家に来たように、台所の中を把握していた。母にも聞かずにお皿を出したり、グラスを出したり、忙しそうに動いていた。確かに広い台所ではない。それでも冬の動きに無駄はなかった。一瞬、亮二は結婚したらこうなのかな、とも考えた。亮二は冬を愛していた。それは、紛れもない事実だ。

亮二は冬に告白したが、冬の気持ちは聞いていない。嫌いではないだろう。亮二はそう思った。でも、はつきりと聞きたい気持ちと同時に、怖さもあった。二人は並んで歩き出した。

「ビックリしたよ。来るなんて言わないから」

「急にごめんね。おかさんに会っておきたかったの」冬は楽しそうだった。電車の中での冬とは、比べものにならぬほど、活き活きとしていた。田舎の道には街灯はない。懐中電灯を片手に、畑のあぜ道を歩いていった。遠くに駅の灯りが見えているが、ここでは懐中電灯が頼りだった。雪が無ければ問題ないが、まだ積もった雪で道はよく見えなかった。亮二には無くても歩ける。しかし、母は冬を心配して渡してくれたのだ。あぜ道の中央だけは踏み固められているが、周りは道の端も分らない。

「氣をつけてね、落ちても畑だから大丈夫だけど」亮二がそう言うのと、冬が急に笑い出した。

「ほんとう？大丈夫？」電灯の明かりを見ながら、冬は尋ねた。

「もちろん、肥ダメはあるけど」亮二がそう言った矢先、冬が思いっきり亮二を押しした。

「うわあ」亮二はバランスを崩し、ゴロゴロと畑に転がっていった。冬はそれを見て大笑いしている。

「ほんとう、大丈夫ね」体半分、雪に埋まった亮二が冬を見ると、いきなり冬も畑にジャンプした。

「あゝ気持ちいい。私、雪って大好き」冬は大きな声で叫んだ。

「都会では、大きな声も出せないわ。だから」雪と戯れる冬は、冬の妖精そのままだった。

「私、亮二さんが好き」冬が大声で叫んだ。亮二の周りの雪が一斉に溶けた。そう感じるほど亮二は嬉しく、照れたのだ。冬は亮二に抱きついた。

「ねえ、結婚してくれる」亮二は信じられなかった。その言葉の持つ意味が、どんなに重要で、どんなに責任があるかぐらいは、亮二にも理解できていた。

「で、でも、僕は・・・」亮二の心配は病気だけだった。

「何も言わずに、返事だけして」冬は亮二の言葉を遮った。亮二はすぐには返事をしなかったが、冬は急がせることも無く、じつと、亮二を見つめていた。亮二は考えた。もし、父のような運命ならば、冬を不幸するだろう。しかし、手術で元気になる可能性もあったのだ。もちろん、手術で元気になるれば、冬に結婚を申し込むつもりでいた。亮二はじつと見つめる冬を見た。断わることなど出来なかった。

「僕でいいの」亮二はやつと声を発した。

「亮二さんがいいの」冬は戸惑いすら見せなかった。

「でも、何で」

「結婚を誓った人意外に、私の身体に触れてほしくない、から」亮二は真赤になる自分が分かった。頬は焼けるように暑く、身体も熱い。耳たぶなどは溶け落ちそうだった。

「行こう」冬は亮二の手を引き、畑からあぜ道に上がった。冬はまるでこの街を知っているように歩きはじめた。冬の足どりは早かった。亮二は冬に全てを任せた。ところが冬は、駅の灯りとは違うほうに歩き出した。亮二は戸惑った。そして、この先の情景を思い出した。何もないはずだ。行けば行くほど街から離れ、小さな池にぶ

つかるはずだった。その先は山に入る。冬はどこに行こうとしているのか、しかしその足どりは、目的地があるような歩き方だった。冬は無言で亮二の手を引いていた。そろそろ池に着きそうなとき、冬は亮二に振り返りかすかな笑みを浮かべた。

「ここ」冬が指差したのは、畑の納屋だ。普段は農機具が収められている納屋だった。

「えっ、ここ？ここで何を」亮二の言葉はそこで止まった。いかに馬鹿げた質問をしたのか気づいたからだ。しかし、冬は何も言わずに手を引き、納屋の中に入っていた。中は狭い。四人も入ればいっぱいになる。しかも多くの農機具がおかれたままなのだ。

「ちよつと待つて」冬が納屋の隅に行くと、小さな焚き火が現れた。どうやって火をつけたのかは、分からなかった。しかも炎に浮かび上がった納屋の内部は、6畳ほどの広さに見えたのだ。暗くて分かんなかったのかも知れない。実際は、6畳の広さがあり、焚き火のスペースもあったのだ。亮二はそう思うことにした。小さな焚き火の割には、寒さは全然感じなかった。冬と二人でいることに、亮二は興奮と喜びを感じていたからかも知れなかった。

「寒くない」向き合う冬が優しく尋ねた。亮二が黙って頷くと、冬は胸のボタンを外し始めた。

「冬・・・」

「黙って」冬は唇を人差し指でそつと触れた。

「でも、人が来たら」

「誰も来ないわ。ここは二人だけの場所なの」冬のブラウスが床に滑り落ち、真っ白な肌に、焚き火の炎が揺らめいた。冬は亮二を見つめたまま、ゆっくりとスカートのホックも外し、ジッパーを下ろした。スカートは音も無く下に落ちた。腿の産毛はキラキラと光り、白い下着もオレンジに染めていた。冬はその場に横たわった。まるで藁のベッドがあるようだ。亮二も無言で服を脱いだ。パンツ一枚で冬に重なり、二人は激しく唇を求め合った。冬は背中を浮かし、ブラのホックを外した。片手で胸を隠しつつ、冬はブラを取りはら

った。ふくよかな胸はその形を崩すことなく、豊かな丸みを見せていた。冬は亮二に頷いて、腰を僅かに浮き上がらせた。亮二は冬のお腹に舌を這わせた。同時に冬の下着をゆっくりを引き下げ、自分も裸のなった。寒さはちつとも感じない。亮二はゆっくりとせり上がり、冬に身体を重ねた。二人の鼓動はぴったりと合っていた。亮二が静かに冬の中に入った。二人の影は納屋の壁に一つになって映し出された。そして二人の影はゆらゆらと燃え上がった。

絆（前書き）

亮二に知らされた、亡き父の愛と母の愛。

絆

家の明かりは消えていた。母と弟は寝たようだ。冬を送り出してから、4時間も過ぎている。冬をホテルに送った後も、亮二は一人星を眺めていたのだ。しかし、用心深い母は玄関の鍵をかけずにいてくれた。弟の部屋からは、微かに音楽が流れていた。襖を開けて中を覗くと、弟は寝息を立てていた。音楽は首にかかったヘッドホンからもれていたのだ。亮二がいた頃は、この部屋で三人が寝起きを共にしていた。上の弟も就職が決まり、隣の県に引っ越した。会いたかったが、仕事が忙しいらしい。コックの仕事には、曜日は関係が無いのだ。隣の母の部屋は静かだった。亮二はそのまま部屋を通り越し、居間へと足を踏み入れた。母はまだ起きていたのだ。暗がりの中、一人亮二を待っていたらしい。

「かあさん」

「話があるんだろう。座ったら」亮二は胸が熱くなった。

「実は・・・」言葉に詰まる亮二を、母はたしなめた。

「はつきり言いなさい。結婚の話じゃないんだろう」母には分かっていたようだ。

「実は、俺、病気なんだ」その言葉に、母はうつむいた。テーブルに置かれた手が、小刻みに震えているのが、暗がりの中でもはつきりと見えた。やがて母は顔を上げ、小さな咳払いのあとに口を開いた。

「医者には、何て言ってる」

「早いうちに、手術を受けると・・・俺、倒れたんだ」母は両手で顔を覆った。

「心臓かい」母には、この日が来ることが分かっていたようだ。

「父さんと一緒なんだね」母は無言で頷いた。指の間から涙が溢れ出し、テーブルを濡らし始めた。肩は振るえ、小さな嗚咽がもれた。亮二は母の肩に手を置いた。その手を母はぎゅっと握り締め、作り

笑いで亮二を見つめた。涙を拭いて母は氣丈夫に話し始めた。

「あれは、お前が3歳の時だった。一向に泣き止まないお前を医者に見せたんだ。その時初めて知らされたのさ。心臓に疾患があるからね。しかも遺伝性だとも聞かされた。お父さんも、私も検査を受けたよ」

「父さんだっただね」亮二の言葉に、母は頷いた。

「でも、医者が言うには、まだ幼いお前に手術は勧めたくない。症状が悪化するとは言い切れない。と、治療をせずに様子を見ることにしたんだ。ところが、医者が正しかったのかね、その後はすぐすくと育ち、お前は元気に学校へ通い出した。覚えてるか、2年の時に大きな病院に行っただろう」亮二は記憶を引っ張り出した。確かに何度か病院には行っていたが、何の検査か分からぬものも受けていた。

「覚えてる」

「医者は言ったよ。今の所問題はないってね。ただ、大人になって、成長が止まった時が心配だと」亮二ははつきりと思い出した。簡単な検査と言いながらも、医者の話に喜ぶ両親の姿が思い出されたのだ。

「そのあとは、本当にお前は元気に育った。父さんも、母さんもそれだけで十分だった。やがて父さんが倒れ、私は覚悟だけはしていたよ。もちろん、発病などしてほしくない。絶対にしないと思ってたよ」

「何故、父さんは治療を受けなかったの」亮二は疑問を投げかけた。「当時は、そんな技術がなかったのさ。それに、お前のことも気がかりだった。父さんはいつも言っていたよ。俺より亮二を考えると俺の治療費は亮二のために取っておくと、何度もね」母は手の甲で涙を拭いた。亮二の目にも涙が溢れてきた。胸が苦しい。心が苦しいのだ。

「手術を受けるんだろ」

「そのつもり」亮二の気持ちは固まった。父が自分の命をなげうつ

てまで、考えていてくれたのだ。その気持ちを粗末にすることは出来ないと、亮二は心から思った。母は立ち上がり、筆笥の引き出しから、一通の通帳を亮二に手渡した。預金通帳だ。中を見ると、今でも欠かさず毎月入金されていた。その金額は、400万にも上っていたのだ。

「お前が、仕送り以外に送ったお金も入れてある。お前のお金だよ。遠慮せずに使いなさい」亮二は声を出して泣き出した。そんな亮二を母はしっかりと抱きしめた。

「必ず、必ずよくなると約束しとくれ。お前に何かあったら、父さんに顔向けが出来ないからね」

「よくなるよ、必ずよくなる」亮二は力強く答えた。

「兄さん」弟も聞いていたらしい。亮二に飛び付き泣きじゃくった。「心配するな。よくなるからな」弟は、しきりに頷いた。

「兄ちゃんは、あの人と結婚するんだ。元氣にならなくてはいけないんだ」亮二は自分自身にも、そう言い聞かせた。

「亮二、彼女は良い子だよ。冬さんのためにも元氣におなり」母も、心から賛成したようだった。

冬はその光景をじっと眺め、一粒の涙を残して姿を消した

不安（前書き）

亮二の故郷での楽しいひと時。しかし、初めて会った弟は、不安に顔をしかめるのだった。

不安

翌朝は雪だった。積もりそうな雪ではない。今年最後の雪だろう。母はそう言っていた。弟は学校に行くまで、亮二から離れなかった。しかし、母も弟も病気のことは、一切触れず他愛のない話に笑っていた。ただ、学校に行くときは、じつと亮二を見つめ小さく頷いてから飛び出して行った。亮二は今日、帰るのだ。3、4日ゆっくりするつもりだったが、冬がいる。3日もホテルに泊まらせるわけには行かなかったのだ。かと言って、亮二の家では落ち着かないだろうし、第一、布団を敷くスペースがないのだ。雑魚寝でよければ問題ないが、冬に雑魚寝はさせられなかった。東京に戻る前に、上の弟も会っておきたかった。母から詳しい場所を聞き、こっそり会に行こうと決めていた。もちろん冬を連れてだ。亮二は最後に、母を抱きしめた。割ぼう着姿の母も亮二を抱きしめた。しかし、母は何も言わなかった。母も仕事だ。二人は揃って家を出た。母は漬物工場で働いている。そこで三人を育てたのだ。それこそ、亮二や上の弟がいるときは、掛け持ちで働き、家族の面倒を見てきた。その苦しい生活の中からも、亮二のためにせつせと蓄えていてくれたのだ。「絶対に元気になる」あらためて亮二は心に誓った。

「おはよう」今日の冬は一段と美しく見えた。

「おはよう、亮二さん」はにかむ笑顔が、朝の日差しにも負けないほどに輝いていた。「この人は僕のものだ」亮二はあらためて思った。昨夜のことは夢ではない。冬の態度がそう確信させた。亮二の手をぎゅっと握り、寄り添う髪からは、昨夜と同じ匂いが鼻をくすぐった。

「今日の予定は」冬が聞いた。

「今日は帰るよ」

「そう……。帰るのね」冬は寂しそうに答えた。

「でも、その前に、弟に会いに行きたい。冬も来てくれる」

「ええ、もちろん一緒に行くわ」冬は元気を取り戻したようだ。時間的には、ランチタイムの遅い時間に行きたかった。あまり忙しい時間では、顔も見れないのでは、と思ったのだ。その為に、時間つぶしが必要だった。亮二の故郷には、これといった名物もない。しかし、有名ではないにしても、城跡があり、蕎麦は美味しかった。まだ雪は止まないが、傘を差すほどでもない。二人は城跡に向かつて歩き出した。冬は東京にいるときよりも、嬉しそうだった。そう見えただけでも知れないが、昨夜のこともあり、亮二の心は幸せで一杯だった。城跡と言っても、堀と石垣、小さな資料館があるだけだったが、冬は心から楽しんでいるようだった。資料館の展示物を見ては、亮二に質問し、屈託なく笑うのだ。この時期の観光は珍しい。それでも、珍しさ以上に冬は皆の視線を集めていた。ここでも冬は、注目の的だった。ただ美しいだけではない。惹きつける何かを持っているのだ。それが亮二には判らなかった。亮二も惹きつけられた一人には違いない。だが、それとは別の何かだ……。驚いたことに、冬は初めて蕎麦を食べたらしい。

「美味しい、美味しい」と喜んでいた。作る過程の実演でも、冬はじつと職人の手先を見ていた。可哀相なのは蕎麦職人だった。冬に見つめられているせいか、所々でミスを犯した。生地を練る過程では生地を落とし、蕎麦生地を切るときには、とうとう自分の指まで切ってしまったのだ。亮二は冬の手を取り、逃げ出した。亮二は笑っている。冬には逃げる理由が解らない。不思議そうに亮二を見る冬も、亮二の笑いにづられ、笑い始めた。

「何で笑ってるの」笑いながら冬が尋ねた。

「あの、蕎麦職人さ。すっごい緊張してたみたい」亮二も笑いながら答えた。

「そうなの、何で？」冬は気が付いていない。それが冬の良さであり、魅力の1つでもあった。

「そろそろ、行こうか」亮二が言うと、冬は頷いた。隣県の最寄り駅までは1時間ぐらいだ。今から行けば、2時頃前には弟の店に着

く。丁度いい時間だった。亮二の田舎よりもはるかに都会的な町だ。子供の頃には何度か来たが、すっかり近代的になり、駅も大きく綺麗になっていた。その新しい駅ビルの8階で弟は働いていた。洋食レストランのコックだ。予想通り、レストラン街は人影もまばらだった。月曜の昼である。買い物客もまばらなのだろう。弟の店も空いていた。メニューを見て、冬は驚いていた。

「こんなに種類があるの」冬の店には数える程度のメニューだが、ここには前菜から始まり、飲み物に至るまで、多くのメニューが載せられていた。ランチメニューも豊富に揃い、6種類の中から選べる仕組みだった。亮二も美味しく感じた。この中のどれかを弟が作っていると思うと、余計にそう感じたのかも知れない。ここでも冬は注目を集めていた。まばらな客も従業員も、冬の動きに注目を向けていた。冬も美味しいと食べていた。食事が終わり、亮二は従業員に弟のことを尋ねた。もうお客はほとんどいない。程なくして弟が現れた。コック服にコック帽、どこから見ても立派なコックだ。誰だろう、とそんな顔で現れた弟だが、亮二の顔を見た途端、大きな笑顔がこぼれた。

「兄貴」弟は亮二に抱きついた。うれしいと同時に大層驚いた様子だった。

「どうしたの、いきなり。元気だった。うれしいな」言葉は後から後から湧き出した。

「昨日は悪かった。仕事が遅番でさ。でも来てくれるなんて、本当にうれしいよ」弟とも三年振りだ。亮二も嬉しかった。

「時間あったら座れよ。紹介したい人もいるし」亮二の言葉で、弟は始めて冬を見た。その途端、弟は固まり動けなくなった。冬は笑って見ている。

「おい、どうした。座れよ」亮二の言葉で、弟は我に返った。

「うん、もう暇だから、少しは座れるよ」そう言って亮二の隣りに腰をおろした。

「こちら、冬さん、婚約者だ」亮二はそう言いながら真赤になった。

冬は笑って手を差し出した。

「よろしくね」差し出された手を握り、弟はさらに硬直した。

「明です。よろしく」それが精一杯の答えだった。亮二は母が冬を気に入ったことや、東京での生活などを明に話した。明もこの三年の出来事などを亮二に話した。その間も、明は何度も冬を見た。冬は二人の会話の邪魔はしなかった。笑い、頷き、感心する。それ以外は会話に参加もしなかった。二人の時間を無駄にはしたくなかったのだ。しかし、亮二は病気のことは話さなかった。折を見て母が話すと思ったからだ。余計な心配はさせたくなかったのだ。

「じゃあ、また来るよ。お前も機会があつたら、東京へ来いよ」二人は肩を叩きあい、そして明は仕事に戻っていった。ただ最後に、亮二の気になることを、一言残していった。「本当に結婚するのか」である。もちろん冬には聞こえないようにだ。亮二にはその意味が理解できなかったが、「もちろんするよ」と答えた。「そうか」明は首を傾けそう答えた。顔には不安さえ窺えた。明の冬に対する反応は、母や下の弟とは違っていた。みんなは、釘付になるほど冬を見たのに反し、明は妙によそよそしかった。人見知りの性格ではない。むしろ、下の弟よりも社交的だ。ところが、冬にはどこか他人行儀な振る舞いだった。冬の美しさに圧倒されたのか、眩しくて見れなかったのか、理由は解らないが、亮二はそれほど気にも掛けなかった。東京行きの切符を買うとき、冬がため息混じりに呟いた。

「亮二さんにの田舎で待つてようかな」

「えっ」亮二は驚いた。冬は何を待つと言つのか、それが理解出来なかった。病気のことも手術を受けることも、冬にはまだ話してはいない。知っているはずはないのだ。

「ううん、なんでもないの」冬は気を取り直して腕を絡めた。しかし、東京が近づくにつれ、冬は言葉を発しなくなつた。それどころか、元氣も失っていった。

訪問者（前書き）

不安を覚えた弟からの意外な問いかけ。そして謎の訪問者。亮二はどうなるのか・・・。

訪問者

渋谷駅に着く頃には、冬はとうとう熱を出した。熱い、熱いといいながらも、身体は冷たく冷え切っていた。かなり調子が悪そうに見えた。しかし冬は医者にも行かず、家に帰ると聞かなかった。別れ際、冬は家の前で驚きの言葉を発した。およそ亮二が想像もしない言葉だった。

「必ず、手術を受けてね。亮二さんは狙われているの」

「えっ、なんだって。何で知ってるの？誰に狙われているの」

「心配しないで、手術を受ければ、狙われないわ。話はお母さんから聞いたのよ」母は亮二に黙って話したようだ。しかし、『狙う』とはどういう意味かが解らなかった。冬は亮二の制止も聞かずに、家に戻ってしまった。どっちにしろ、冬はもう知ってしまった。なるべく早く手術を受けて、元気になる必要に迫られた。亮二は2階の窓を見上げた。部屋の明かりは灯る素振りを見せなかった。辺りはもう真っ暗だ。亮二は諦め、駅に向かって歩き出した。携帯を取り出し、母に連絡を入れた。

「かあさん。昨日はありがとう。うん、今、送ったところ。そう、かあさん、冬に言ったの？」答えは違った。弟も話してはいないようだ。冬は誰から聞いたのか、不思議だった。しかし、考えれば不思議な事ばかりだった。亮二が田舎に行くことも知っていた。そして老婆に道行く人々。唯一、明だけは違った。

明は何かに気が付いたように思えた。母との電話を切ったあと、そのまま明の番号をプッシュした。今日は早番だといっていた。案の定、2度のコールで明は電話に出た。

「今日は、ごちそうさん」

「無事着いたんだね」昼に会ったが、その声は懐かしく感じた。

「ところで、明。お前の言葉が気になってさ」亮二は挨拶のついでとも、言えそうな口ぶりだった。

「冬さんはいるの？」冬には聞かせたくない話のようだ。

「もう、送り届けたよ」明は安心したように話始めた。

「結婚するのかい」帰り際の言葉と同じだ。

「そのつもりだけど、何故だ」

「冬さんは・・・」明は口ごもった。どう言っていいか解らない様にも聞こえた。

「はつきり言えよ」亮二ははつきりと苛ついた。明は亮二の結婚を喜んではないのだ。祝福してもらいたい出来事なのに、一番仲の良い弟が意味不明なことを言う。つい言葉が荒れた。

「冬さんは人間かい」その答えに、亮二は笑いそうになった。突飛過ぎたのだ。

「馬鹿なこと言うな。兄ちゃんも冬さんと・・・」亮二は納屋での出来事を思い出したが、そんなことは言えない。冬の手前もある上、恥ずかしさもあつたのだ。

「どうした？」明は次の言葉を待っていた。

「冬さんとは、キスもしたんだ」どうにか考えついた答えだった。

「人間に決まつてるだろう」

「それならばいいけど・・・。ちょっと気になったんだ。影が、いや、身体全部が薄く見えたんだ」亮二は正直驚いた。明は霊感が強い。今では知らないが、子供の頃は強かった。幽霊とかを見るわけではなく、死の迫った人が分かつたのだ。元気だった叔父の突然の死も、明には事前に分かつていた。

「叔父さん、具合が悪いの」楽しく大声で笑う叔父に、当時5歳の明が話しかけた。その場のみんなは驚いたが、叔父は頭を撫ぜながら、明に言った。

「大丈夫だよ。ありがとうね」その3日後、その叔父は他界した。突然の心臓発作にみまわれたためだったが、誰一人想像すらしないことだった。明を除いては・・・。その明が言うのだ。一概に嘘と決め付けるわけにはいかない。だが、気のせいとしか思えなかった。冬の温もりを感じ、冬の全てを知った今、亮二には明の言葉を否定

するしかなかった。

「心配してくれるのは嬉しいけど、大丈夫だ。安心しろ」亮二は言い放った。

「そうか、なら、いいけど。兄貴には幸せになってほしいからな」兄貴思いのいい弟だった。明には分かっていたのだ。亮二が高卒で遠くに就職した理由を。だから明も兄貴に見習い、高卒で働きに出たのだ。母は病気のことはまだ言っていないようだった。またの再会を誓って亮二は電話を切った。明との再会の為、親父の意志の為、かあさんとの約束の為、何より冬との為に早く手術を受け、元気になる必要があった。金はある。両親が亮二の為にこしらえてくれたお金だ。明日は病院に行こうと心に決めた。

その夜亮二は重苦しい雰囲気で、目を覚ました。明日にでも春が来そうなのこの時期に、寒さで目が覚め

得体の知れない重圧を受けたのだ。部屋はいつもと変わらない。だが、どこかおかしい。部屋全体がうごめいているようだ。天井のどこかで音がする。何かが弾けるような音だ。カーテンも揺らめいている。隙間風では無さそうだ。不意にテーブルのカップが下に落ちた。就寝前に飲んだ紅茶のカップが、急に倒れ床に落ちたのだ。レコードのぎつしり詰まった本棚が、ぎしぎしと揺れだした。天井の常夜灯もチカチカと点滅を始めた。亮二は恐ろしさに身を固めた。普通ではない。地震でもない。その証拠に、寝床自体は揺れていないのだ。突然カーテンが大きく揺れ、黒い霧が現れた。その霧は徐々に密度を増して、人の形に変化した。亮二は何も言えずに凝視した。動きたくても動けなかったのだ。その影はゆらゆらと浮いていた。明らかに人間と思えるが、その顔は見えない。ただ、瞳だけが不気味に光っていた。

「お前は、死ぬ運命だ」その影が喋った。実際には喋ってはいない。亮二の頭に話しかけたのだ。

「その金を使うのか？その金で、母と弟たちは楽になれるものを・・」亮二ははつとなった。確かに自分の事しか考えていなかった。

「お前の親父は、自分の命と引き換えにした。お前は弟を見捨てるのか？」さらにその影は驚きの言葉を発した。

「弟も、同じだ」病気は遺伝性。確かにそう言っていた。自分だけではない？弟も？亮二はそこまで考えなかったのだ。弟たちも同じ血を引いている。可能性はあるのだ。

「それじゃ、弟も？」亮二はやつと声を出した。得体の知れない影だが、不思議と恐ろしさは消えていた。それよりも、これから弟に降りかかる災難を心配したのだ。

「下の弟。三年後だ」影はそれだけを答えた。亮二は自分の身勝手に落胆した。もしも、この金を使ってしまったら、弟はどうなるのだろう。亮二は頭を抱えた。その時、不気味な影が怯んだ。亮二の隣りに光り輝く物体が現れたのだ。その光の真ん中には、冬がいた。白い衣をまとった冬がいたのだ。冬は黒い影と対峙し、激しく言い放った。

「消えなさい！己の居場所に戻るのです」影も負けてはいなかった。「邪魔をするな。こいつは俺のものだ」亮二は訳が判らなかった。

光の冬は確かに冬だ。その声も冬の声だ。しかしそこにいる冬は宙に浮き、突然、部屋に現れたのだ。

「冬・・・」亮二は思わず呟いた。光の冬は優しく亮二を見つめ静かに答えた。

「私は冬ではありません。これの言うことは全て嘘。惑わされてはいけません。二人の弟は心配ないですよ」笑顔も冬そのものだった。いきなり黒い影が、光の冬に突進した。ところが黒い影は、輝く光に弾き飛ばされ、カーテンの隙間から消えていった。

「いいですね。あれの言った事は忘れなさい。嘘で騙すのがあれの手口。惑わされないように」そして光の冬も消滅した。亮二は目を疑った。今、ここで起きたことは、事実としか思えなかった。光の冬は誰なのか、黒い影は何者なのか？亮二の理解をはるかに超える出来事だった。

涙と笑い（前書き）

母と弟。亡き父の愛に包まれ、亮二は決心した・・・。

涙と笑い

一睡も出来ずに朝を迎えた。不思議な体験のあと、亮二はずっと起きていた。起きていれば、夢だったとは言えないと思ったのだ。こうして今考えても、あの出来事は事実には相違なかった。落ちたカッブはそのままで、レコードも何枚かは床に散らばっていたのだ。話から察すると、黒い影は死神であろう。そして光の冬は神？そうだが、冬が気がかりだ。亮二は慌てて冬の店に電話を掛けた。呼び出し音は聞こえるが、出る気配はなかった。冬もかなり具合が悪そうだった。病院でも行ったかなと考え、亮二も病院行きを思い出した。急いで用意をして、亮二は家を出た。

長い時間を検査に費やした。夕方近くになって、ようやく医者の方が見え、所見が聞かされた。

「言いにくいですが、急いだらうが良さそうです。難しい手術で5割でしょう」亮二が家族は来れないと医者に伝えると、医者は亮二に真実を話した。亮二は落ち着き、恐怖も戸惑いも見せなかったからだ。5割の意味も、亮二にはしつかりと伝わったが、亮二は少しもうつらたえなかった。光の冬が付いている。そう思ったのだ。手術は三日後に決まった。それほど緊急を要したらしく、スケジュールの調整で、やっと決まったのだ。亮二は母に連絡を入れた。母は前日の昼には来ると言っていた。そして課長。課長も当日に顔を出してくれるようだ。後は冬。冬には会って伝えなかった。しかし冬とは連絡が付かなかった。翌日店にも出かけたが、シャッターが降りたまま、外から呼んでも出てこなかった。中の様子を窺ったが、人の気配も感じられなかった。亮二は焦った。このまま会えなくなるのでは。そう思ったのだ。その翌日も、冬とは連絡が取れなかった。今日は亮二の母が来る。仕方無しに亮二は母を迎えに行った。

「あたしからも、連絡入れるよ。それより、お前は、明日のことだけ考えてなさい」母の言葉はきしかった。それほど心配しているの

は亮二にも理解できた。今は手術に専念しよう。亮二はそう思った。今まで冬は、何も言わなくても、分かってくれていたのだ。今回もキット……。そんな期待に亮二は賭けた。

「案外綺麗にしてるんだね」亮二の部屋に、母が来るのは初めてだった。

「お前は、昔からしつかりしてたからね。心配はしてなかったけど。まさか、冬さんに掃除させてはいないだろうね」

「大丈夫だよ。まだ、ここには来た事ないから」光の冬が、冬でなければ亮二の答えは正しかった。

「そうかい。美味しいものでも作るかね」母は腕まくりをしながら、台所に向かった。

「かあさん、ごめん。食事制限で食べられないよ」手術の注意書きに、前日の夕食は抜くように書かれていたのだ。亮二はおとなしく書面の注意に従った。

「遠慮しないで、かあさんは食べて」亮二の優しい言葉が、母の胸を締め付けた。

「そうかい、じゃあ、簡単に済みますかね」そう言いながら、突然、母は台所で泣き崩れた。

「ごめんよ。亮二。父さんを許しておくれ」

「何言ってるの、かあさん。父さんにも、かあさんにも感謝してるよ。冬にも会えたんだ。生んでくれたお陰だと思ってるんだ」亮二は駆け寄り母を抱きしめた。母は何度も亮二に謝っていた。気丈な母のこんな姿を、亮二は初めて目の当たりにした。亮二の頬にも涙が伝わったが、亮二は必死に堪えた。その夜は、久しぶりに二人だけの時間を過ごせ、思い出話に花が咲き、遅くまで語り合っていた。

翌朝、バッグに荷物を詰めているとき、ドアが激しくノックされた。弟の明だった。

「もう、この前言ってくれれば、昨日から休めたのに」開口一番、明はまくし立てた。

「ごめんよ、まだ決まっていなかったから」亮二は答えた。

「でも、心配はしてないよ。兄貴を信じているから」亮二は明に抱きついた。

「お前らしいよ。でも、お前の言葉を、俺も信じる」亮二は、笑った。みんなも笑った。誰一人、残り五割のことなど、考えてはいなかった。部屋を出ようとした時に、課長もやってきた。

「ふう」間に合った。車を借りてきたからな「課長はわざわざ、会社のワゴンを借りてきてくれたのだ。母は丁寧に挨拶を交わし、課長も恐縮していた。あとは冬がいてくれれば・・・」。

理由（前書き）

残り2話。次々と判明する理由。驚く亮二は・・・。

理由

具合が悪くもないのに、病院のベッドに寝かされるのは、どこなく照れくさかった。亮二はそう思ったが、身体の中では、確実に死への秒読みが始まっていたのだ。母と弟、課長がまわりにあつまっている。だが、病氣の話は一切話題には上らない。皆、気を使っているのが、亮二にも伝わった。看護師が体温を測り、注意事項を母に伝えた。時間は刻々と迫ってくる。冬は来ない。時たま母が電話を掛けに行くが、首を振り振り戻ってくるのだ。和やかに見える雰囲気も、看護師の一言で終わりを告げた。

「そろそろ、準備します。廊下でお待ちください」母は、名残惜しそうに亮二を見つめた。カーテンが引かれ、看護師が着替えを亮二に渡した。頭もキャップをかぶせられ、亮二も幾らか緊張し始めた。「大丈夫、心配しないで」

「ありがた……」冬だった。看護師制服を着ているが、その顔は冬に間違いなかった。亮二は驚きで声を失った。自然と目から涙がこぼれた。会いたかった冬、その冬が目の前にいる。

「冬……」亮二は声にならないほど小さく呟いた。

「私は冬ではないの。でも、彼女はよく知っているわ」身体はせつせと仕事をしているが、顔だけは亮二に向かい、優しく答えた。

「でも……」亮二が手を握った瞬間、冬の顔は先ほどの看護師へと戻っていた。

「大丈夫ですよ」看護師は優しく亮二の手をはらった。亮二の涙が、看護師の気持ちも変えたようだった。可哀想にと、その表情が語っていた。準備が終わると、もう一人の看護師が、ストレッチャーを運んできた。テレビとかではよく見る、キャスター付きのベッドだが、それに乗るとは、亮二も思いもしなかった。カラカラという音と共に、天井の蛍光灯が頭上を移動する。エレベータに乗せられたが、上か下かも見当がつかない。母は亮二の顔を覗き込み、ぎゅっ

と手を握った。多くの扉を抜けたあと、証明の沢山ある部屋に辿り着いた。手術台に移動させられ、医師が亮二に話しかけた。

「これから行いますが、全身麻酔です。気がついたら終わっていますよ。緊張せずに任せてください」マスクで顔は見えないが、声から笑顔が想像できた。その間も、点滴の注射が打たれ、脈拍、血圧、体温などの測定装置が、亮二の身体に取りつけられていった。

「では、麻酔をかけます。10から逆に数えてください」10、9、8・・・亮二は電車に乗っていた。

あの電車だ。古めかしい電車だが、故郷の電車。そして学生とおばあさん。その学生が亮二を見た。あの時と同じ父だった。父は笑いながら亮二に近づいた。

「良かった。手術を受けてくれて」学生の父が言った。その時おばあさんも立ち上がり、亮二に近づいた。しかしその人はおばあさんではなく、冬だった。いや、光の冬だった。

「私たちは、貴方を見守っていました。貴方の運命も決まっています」光の冬が話した。

「どういうことですか」

「本当ならば、まだまだ、先のある貴方の寿命を、貴方は自ら捨ててしまうのです」

「なぜ」亮二は理由が判らなかった。

「貴方も見たでしょう。黒い霧を。思ったように死神です。貴方は死神に憑かれ、手術を拒否するのです。弟のことを思って」亮二は思い出した。死神が言った言葉を。死神は、弟も同じだと言っていたのだ。おそらくその時に光の冬が現れなかったら、その言葉を信じ、手術は受けなかったかも知れない。しかし、亮二には冬がいる。手術も受けたかもしれない。その時、光の冬が言った。

「彼女は私の娘です。もちろん私たち同様に、貴方を守っていたのです」亮二はその時全てを悟った。冬が亮二の前に現れたことも、皆が冬に注目したことも、老婆が拜んでいたのは、それが見えなかったのだ。学生の父が亮二の肩を抱き、静かに言った。

「お前には苦勞をかけた。すまない。でも、これから幸せになつてくれ」亮二も父に抱きついた。そして光の冬に尋ねた。

「じゃあ、もう冬には会えないんですね」

「あの子の仕事は終わりました。春の訪れと共に。あの日貴方が送った日が最後です」亮二の目から涙がこぼれた。手術台の亮二も涙を流していた。手術は4時間で終了した。亮二は麻酔で眠ったまま、病室の戻ってきた。手術の成功をきき、母も弟も安堵の表情を浮かべ、医師に感謝の言葉を何度も言っていた

永久に（前書き）

最終回。

永久に

病室に戻って5時間後、亮二は目を覚ました。身体はだるい。胸には引つ張られる感じが残っている。

麻酔がまだ効いているのか、痛みはない。心拍数を示す機械が、規則正しく波を打っていた。腕には何本もの点滴がつながっていた。喉が渴いた。亮二は少し頭を浮かせ、周囲を見回した。母と弟の明は、椅子に座り眠っていた。母の手は亮二の手を握っていた。亮二は母の手をぎゅっと握り、小さくゆすった。

「うん、あ、気がついたね」母は目を覚まし、亮二の頭を撫ぜた。

「うん、ちょっと喉が渴いた」母は亮二に白湯を飲ませた。飲み込むたびに胸が引きつった。

「痛いのかい」顔をしかめる亮二に、母が尋ねた。

「ううん、突つ張るだけ。痛みはないよ」二人の会話で、明も目を覚ました。

「お帰り」明の顔は笑っていた。

「二人とも聞いて。父さんに会ったよ」亮二は手術中に見た現実とも思える夢や、今までの出来事を二人に話した。母は声を出して泣き出した。明も目頭を押さえている。

「ずっと見守ってくれていたんだね」亮二は父の気持ち嬉しかった。自分の治療費を亮二の為にと残しただけでなく、ずっと考えてくれていたのだ。冬のことはもちろんショックだ。しかし、それも父の愛によるものだと思うと、不思議と心は癒された。

翌日の朝に明は帰っていった。仕事があるようだ。次の休みも顔を出すと言っていた。母はゆっくり出来るらしい。とりあえずは亮二のアパートにとまることにしたようだ。朝に来ては夜に帰る。そんな日々が一週間ほどした時に、亮二は母に言った。

「もう大丈夫だよ。痛みもないし、あいつが心配だ」亮二は下の弟のことが気がかりだった。

「そうだね、いつまでも面倒見てもらうわけには行かないし・・。一度帰るとするかね」弟は、友達の家で世話になっていた。弟は、心配をよそに楽しんでた。母もその2日後に家に帰っていった。医者の話では、術後の経過もよく、あと2週間で退院出来るそうだ。退院も近づき、抜糸が終わった日の夜だった。看護士が亮二の体温を測りに来たときに、うれしい出来事が起きた。

「いかかですか。もうすぐ退院ですね」亮二が返事をしようとした時、光の冬が現れた。

「まだその気ならば、退院してから行きなさい」

「えっ」亮二がその声に気がついた時には、既にいつもの看護士に戻っていた。しかし亮二には、その意味がはつきりと理解できたのだ。亮二は退院が待ちどろしかった。もう一度冬に会える。そう信じていたのだ。亮二は歩行練習も始めた。足は完全になまくらになっていた。一歩が辛い。しかし、家に帰れば一人だ。亮二は一生懸命に歩き続けた。退院の日には、かなり回復していたが、安全の為に杖が渡された。母も退院に合わせて上京してきて、課長も車を出してくれた。

「無事に退院できて良かった」母も課長も喜んでくれた。明は仕事の都合でこれないらしいが、休みのたびに病院に来てくれ、空白の3年を埋めるのには十分だった。課長は仕事の話もしないで、送るとすぐに会社に戻っていった。水入らずを邪魔しないよう、気を使ってくれたのだ。部屋は綺麗に片付いていた。母のお陰だ。母は暫く実家に来ないかと誘ってくれた。母の気持ちは嬉しかったが、亮二にはやらなければならないことがあった。冬の店に行くことだ。

2日後、母は残念そうに家に戻った。亮二の足は、以前のように回復していた。胸の痛さもない。生まれ変わったように、気分は良かった。明日は冬に会いに行く。そう決めた途端、亮二の心も生まれ変わった。

春の日差しは優しく亮二を包み込んだ。ポカポカと暖かい。亮二は電車内で眠りそうになったが、寝る間もなく渋谷に着いた。人々

の服も薄着になり、春の陽気を堪能していた。僅か2ヶ月程度の間だが、久しぶりの坂道は懐かしく、こんなにも急坂だったのか、と亮二を驚かせた。坂の途中には、新しい店も出来ていた。以前は空き店舗だったのが、小さな花屋が出来ていた。亮二はその店に入った。狭い店だが多くの花に埋もれていた。亮二は奮発して大きな花束を作ってもらった。見慣れたわき道。亮二の足は自然と速くなった。道を曲がると駐車場。そして数件の民家。そして冬の店……。ない。冬の店がない。冬の店があったところには。何の変哲もない家があるだけで、店と呼べる面影はなかった。亮二は慌てて周囲を見回した。かつて亮二が冬の部屋を見上げた場所に、間違いはない冬の店は、冬はどこに行ったのか、亮二は途方にくれた。亮二は当てもなく彷徨った。その周辺を歩き回ったのだ。しかし結局は冬の店は見つからなかった。光の冬は言っていた。冬は娘だと。それが事実ならば、冬の店は光の冬が料理を作っていたことになる。光の冬が人間以外、神の使いと考えれば、突然に店がなくなっても不思議ではなかった。ほかにお客がいなかったのも、亮二にしか見えなかったと仮定すれば、つじつまが合う。亮二は一冬の間、現実と夢の間に身を置いていたのだ。しかし光の冬は確かに言った。「その気ならば行きなさい」と。

亮二花束を捨てた。どこに行けばいいのか見当も付かなかったのだ。アパートに戻り、亮二は泣いた。声に出して泣き続けた。翌日、会社に顔を出し、暫く実家に戻ると伝えた。課長は一言、待つてると、亮二の肩を叩いた。亮二は揺られる電車の中でも、冬のことを考えた。どうしても諦め切れなかったのだ。しかし、思惑とは裏腹に、冬の居場所はわからなかった。母は暖かく迎えてくれた。美味しいものを作るんだと、張り切って台所に立ったが、肩が震えるのを亮二は見逃さなかった。亮二は散歩に出た。母の姿を見ていられなかったのだ。雪はまだ残っている。ふと見ると、畑に大きな穴が開いていた。人が転んだような穴が、まだ残雪に残っていたのだ。亮二は思い出だした。冬とふざけ畑に転がったこと、冬が結婚のこ

とを言い出したこと、つい昨日のような気がした。その時亮二ははつとした。二人が結ばれた納屋のことを。亮二は、走った。心臓の鼓動は激しくなる。息も苦しい。それでも亮二は走り続けた。この程度で負けるものかと……。納屋は、確かにそこにあった。夕日の中に浮かぶ納屋は、とても6畳の広さがあるとは見えなかった。あの出来事も、夢と現実の隙間だったのだろうか。亮二は納屋の扉を開いた。農機具が収まった狭い空間には、冬の姿はなかった。息が切れた。亮二はその場に座り込み、胸を押さえた。そんな亮二の耳に、雪を踏む音が聞こえた。

「花束、もったいなかったね」振り向くと冬が立っていた。

「冬、本当に冬だね」亮二は立ち上がった。冬は亮二を見つめ、黙って頷いた。

「冬」亮二は思いつきり冬を抱きしめた。冬の温もり冬の匂い。全てが冬のものだった。

「会いたかった」冬も亮二に抱きついた。

「でも、なんで？」

「貴方の気持ち私が私を引き止めたの。もう、何の力もないただの間。それでもいい？」亮二は何度も頷いた。たとえ幽霊でもいいと思っていたのだ。答えは言うまでもなかった。

「私の母から、1つだけ言付けがあるの。二人の子供に、遺伝は残らない。って」亮二は冬を抱え、踊りだした。僅かに冬は重たく感じた。おそらく、魂がしっかりと根付いたからだろう。亮二はそう思った。

完

永久に（後書き）

最期まで読んでいただきありがとうございました。書きながらも思ったのですが、近頃は、親族の愛が薄くなったように感じます。子供を殺したり、親を殺したりと、悲しい事件が続いています。恋愛と言いつつながら、家族の愛に重点を置きすぎたように思いますが、ご了承くださいたく思います。ありがとうございます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3078d/>

女神

2010年10月8日14時59分発行